

平成21年8月4日

「この人に聞く」成熟社会と建築

青山学院大学総合文化政策学部教授
鈴木 博之



■ 成熟社会と建築についてお話をお伺いします。

日本は、スクラップ&ビルドからストック活用型の社会に移行を目指していると言いつつも、変化は遅く感じられます。例えばG7諸国と日本の官庁施設を比較すると、霞ヶ関では100年を超えた建物は、法務省(赤レンガ)だけですが、空襲を経験したベルリンでも1700年代、1800年代の建物がかなりあり、ストックホルムでは1600年代の建物が官庁施設として現存しています。このことについてどのようにお考えになりますか。

建物を時間軸で捉えてヨーロッパの国々と比較すると、霞ヶ関の官庁施設は、ヨーロッパ諸国の官庁施設ほど長く使おうという意識は感じられません。官庁施設は本来長く使われるように、例えば階高にもゆとりを持つなどの工夫をして、また愛着を持って使われるべきですが、一時期の建物は機能を果たすことに限定され、経済活動の一部のようで、官庁施設や霞ヶ関をどのように誘導しようという方針が感じられませんでした。結果として、残すべき建物が壊され、新しい建物に変わりましたが、コストを下げることを目標としたため、日本の顔としての霞ヶ関としてはつまらないものとなっています。地方の官庁施設も、創り出す建築の質や性能にもっと注意を払うべきで、公共建築の存在が地域においてもっと説得力を持つべきでしょう。それが、長い寿命の建築へと繋がるのではと考えます。

霞ヶ関では、外務省が庇を持った特色ある建築で、DOCOMOMO100選(現在135選)にも掲載されて、長く残るべき建築でしょうし、古い建物の保存でも、旧文部省庁舎のように部分だけではない保存の方法は、都市の記憶を残す上で効果があります。

■ ストック型建築を進めるためには社会での教育も必要ですが、大学などの教育も不足する点があるのではないのでしょうか。

建築教育で何が大切かを考えると、構造体の時間的観念が短すぎる事が挙げられます。「建築に関する10書」で有名なローマ時代の建築家ウィトルウィウスの言葉に、「建築に一番大事なものは用・強・美だ」というのがあります。用(utilitas)は、使いやすさ、機能を、美(venustas)は美しさを、強(firmitas)は、地震などに対する強さを意味すると

一般的には理解されていますが、実は firm は英語の confirm として使用されるように、固める、長く保つと言う意味もあり、瞬間的な強さだけでなく、何百年もの時間の中で保有する耐久性をも意味します。

日本の建築構造教育には耐候性、耐久性を含まれていません。もっと、ライフサイクルコストの視点、イニシャルコストとランニングコストのバランスを考えるべきです。

■公共建築ではこれから多くの建物が、大規模な修繕や建替えの段階になりますが、財政などの要因から、多くの建物が長寿命化せざるをえない状況になるとと思いますが、残す建築、消える建築を選択する方法はどのようにお考えですか。

それは非常に難しい課題です。

ある程度のルールは必要ですが、画一的なルールだけでは都市景観が面白くなくなります。また規模の大小ではないでしょう。例えば中銀カプセルタワービルや静岡放送新聞ビルなどは形状がランドマークであり、小さくても意味があります。やはり地域に愛される建築は残されるべきで、たどえは悪いですが、B級グルメの建築が混在するのが日本的な都市の面白さで、それをヨーロッパのような街並みにしてしまったら日本の魅力は失われると思います。建築には貴賤なしで、大きくりっぱな官庁施設・文化施設から小さな店舗までが同列に扱われるべきですね。やはり、地域のエネルギーを大切にすることが必要でしょう。